

Notation, Grammar, and Diction in Nichigo-Kappo, a Japanese Textbook in the Meiji Era

Takayuki Ito*

College of International Studies

Public University Corporation Meio University, Japan

Abstract

In this paper, the author reports on the notion and usage in Kanzo Omiya's "Nichigo-Kappo," a textbook of Japanese language for Chinese learners during the Meiji era. Specifically, he studies the writer Kanzo Omiya's career, the textbook's bibliography, and the wordings (expressions) of possibility, duty, and causal conjunctions. During the Meiji era, the transition period in the history of the Japanese language and its education, "Nichigo-Kappo" plays a central role not only in showing Omiya's achievement in Japanese language education but also in being a precious resource for modern Japanese.

Keywords: History of Japanese language education, History of modern Japanese, Textbook of Japanese language in the Meiji era, Kanzo Omiya, Nichigo-Kappo

* Corresponding author e-mail: ito@meio-u.ac.jp

明治期日本語教科書大宮貫三著『日語活法』の語法

伊藤孝行

名桜大学 国際学群

要旨

本稿は明治期日本語教科書大宮貫三『日語活法』の語法について述べる。まず、著者大宮貫三について、そして『日語活法』の書誌(構成)について述べる。また、『日語活法』が発行された時期に変化がみられた可能表現、当為表現、「マイ」「ナイダロウ」、「マセナンド」「マセンデシタ」、原因理由の接続助詞「ノデ」「カラ」、「シ」と「セ」・「マシ」と「マセ」という表記のゆれ、そしてことばの右側に付されている一本線・二重線の意図について述べる。

こうした日本語教科書は、これまで明らかにされてきた国語史にとっても、また日本語教育史にとってもさまざまなことが再発見されうる可能性がある資料であり、『日語活法』もその一つではないだろうか。

【キーワード】日本語教育史, 国語史, 明治期日本語教科書, 大宮貫三, 日語活法

1. はじめに

伊藤(2005)にて中国人日本語学習者向け日本語教科書、『日語活法』(大宮貫三著, 明治40(1907)年刊行, 三康図書館蔵)に於ける文法学習項目について述べたが、本稿では『日語活法』に於ける表記、語法を中心に述べる。

2. 大宮貫三『日語活法』について

2.1 大宮貫三について

『日語活法』を著した大宮貫三については、不明なことが多い¹。管見の限り、大宮貫三について述べられているものに、『早稲田大学百年史』²、吉岡(1994)がある。

大宮貫三は明治12(1879)年10月9日、千葉県夷隅郡上瀑村(現大多喜町下大多喜)に生まれた。大宮家は上瀑村の資産家で、二つの蔵を持つ家であった。貫三の兄・禎二は上瀑村村長を

¹ 大宮貫三については、履歴書の閲覧を許可して下さった早稲田大学大学史資料センター、ならびに大宮貫三についての聞き取り調査に応じて下さった大宮泰司氏によるところが多い。ここに記して感謝申しあげる。

² 『早稲田大学百年史』第2巻第9章171頁に、第7表・清国留学生部予科講師および担当科目(明治38-39年度)、同188頁に、第9表・清国留学生部予科講師および担当科目(明治40-41年度)があり、大宮貫三が日本語を担当していたことがわかる。

務めた。明治29(1896)年4月、東京本郷にある私立中学郁文館に入学、明治33(1900)年3月、郁文館を卒業した。同年9月、東京専門学校(早稲田大学前身)文学部に入学、哲学・英文学を専攻し、明治37(1904)年3月、早稲田大学文学部卒業。同年5月に師範学校・中学校・高等女学校の英語・修身・教育の教員免許状を取得。同年9月から明治38(1905)年8月まで、成城学校にて英語・日本語を担当。同年9月から明治43(1910)年7月まで、早稲田大学清国留学生部にて日本語を担当。その間の明治40(1907)年4月、『日語活法』を著す。早稲田大学清国留学生部の閉鎖と共に早稲田大学を去った後は不明であり、没年も現在のところ不明である。

2.2 『日語活法』について

現在、『日語活法』の所蔵が確認されているのは、国立国会図書館・早稲田大学図書館・三康図書館の三箇所である。早稲田大学図書館蔵本については吉岡(1994)に述べられているのでここではふれず、他二本について述べると、国立国会図書館蔵本はマイクロフィッシュになっており、三康図書館蔵本は現物を閲覧できる。本稿では現物を閲覧できる三康図書館蔵本を使用した。『日語活法』の構成については、吉岡(1994)に於いてもふれられているので重複を避けて述べると、表紙には「大宮貫三著 日語活法 早稲田大学出版部蔵版」、奥付には「著者大宮貫三 発行者荒川信賢 印刷者石井要蔵 印刷所丸利印刷合資会社 発行所早稲田大学出版部」とある。大きさは見開きにしてA4版、頁数は全224頁である。

2.3 日本語教育史から見た日本語教科書の分類—『日語活法』の位置—

吉岡(2000)に、明治期日本語教科書の内容・構成を分析し、主に何を教えることを目的に作成されたかという視点で、6つに分類されている³。その分類によると、『日語活法』は「B.語法型教材」中の「②語法用例教材」と位置づけられている。「B.語法型教材」及び「②語法用例教材」の定義を以下に引用する。

B.語法型教材(日本語が実際に使えるようにするために選択された学習項目を中心に構成された教材)

³ A. 文典型教材(日本語学習者に対し主として文法を中心に日本語を体系的に理解させる目的で作成された教材)

A-① 文典総合教材(発音、文字、語彙、文法、会話、読み物など広い視点から網羅的にとりあげて、日本語を体系的に理解させることを主眼として構成)

A-② 文典教材(主として日本語の文法項目を中心に解説)

B. 語法型教材(日本語が実際に使えるようにするために選択された学習項目を中心に構成された教材)

B-① 語法総合教材(教師が教室で使用することを想定し、各課の学習項目の量や各課の配列などが考慮されている教科書の体裁をとった教材で、四技能を並行して学習することが前提と考えられる)

B-② 語法用例教材(文型的な学習項目が列挙されて、それぞれに用法を示す例があげられている)

C. 読解教材(「読本」と呼ばれる読解を目的とした教材、副読本的な利用が可能な教材)

D. 会話教材(場面や話題ごとに構成され、そこで行われるであろう会話のモデルが示されている教材)

E. 文字教材(五十音図などを示し文字や発音について簡単な説明を行っており、文字学習のために編纂された教材)

F. その他の教材

B-②語法用例教材(文型的な学習項目が列挙されて、それぞれに用法を示す例があげられている)

2.4 『日語活法』の表記—金井保三『日語指南』との比較—

表記は大半が漢字とカナで記されている。原則として中国語のみの説明が記され、その後日本語の例文が列挙されている。但し、例文中ところどころに中国語での説明が付されている。早稲田大学清国留学生部に於いて大宮貫三と同じく日本語を担当であった金井保三による日本語教科書『日語指南』の表記と『日語活法』の表記を比較してみると、『日語指南』は前半を表音式仮名遣い・棒引き仮名遣い(長音を「一」で表記する仮名遣い)・分かち書きを採り、ひらがなとカタカナを織りまぜているのに対し、『日語活法』は初めから歴史的仮名遣い・分かち書きをせず、すべて漢字カナ表記となっている。同時期同じ清国留学生対象とした教科書『日語指南』と表記が異なる理由について、あくまで憶測にすぎないが、金井・大宮の日本語教育歴が関係しているのではないかと考える。『日語活法』には

2.5 『日語活法』の構成と特徴

構成は全4篇、第一篇助詞⁴・第二篇動詞・第三篇形容詞・第四篇助動詞となっている。以下各篇別に概観すると、第一篇助詞は全76節(3-170頁)あり、各篇中最も多く紙数が割かれている。どのような項目がたてられているか、参考1⁵として掲げる。

参考1『日語活法』第一篇助詞に於ける項目

| | | | |
|-----|--------------------|-------|-------------|
| 第一節 | ガ…マス(現在時) | 第三十九節 | 「ニ」用法意趣(九) |
| 第二節 | ハ……デアリマス(現在) | 第四十節 | 「ニ」用法意趣(十) |
| 第三節 | ハ……デス | 第四十一節 | 「ニナリ」用法(二) |
| 第四節 | 「ノ」用法及意趣(一)及マス之過去時 | 第四十二節 | 「デ」用法意趣(二) |
| 第五節 | 「ノ」用法(二)及意趣 | 第四十三節 | 「デ」用法意趣(三) |
| 第六節 | ヲ用法及マセウ | 第四十四節 | 「カラ」用法(一) |
| 第七節 | 「モ」用法意趣(一) | 第四十五節 | 「カラ」用法(二)助辞 |
| 第八節 | 「ヘ」用法意趣 | 第四十六節 | 「カラ」用法(三) |
| 第九節 | マシテ用法 | 第四十七節 | 「カラ」用法(四) |

⁴ 目次および本文第一篇の見出しには「第一篇助詞」と記されているが、本文部分に記されている見出しには「第一編助辞」と記されている。

⁵ 項目名は、目次に記されているものと本文初めに記されているものと若干異なっている箇所があるが、ここでは後者を探った。

| | | | |
|-------|-------------------------------|-------|--------------------------|
| 第十節 | 「ニ」用法意趣(一) | 第四十八節 | 「カラ」用法(五) |
| 第十一節 | 「ト」用法意趣(一) | 第四十九節 | 「カラ」用法意趣(六) |
| 第十二節 | 「ノ」用法(三)及デシタ | 第五十節 | 「ガ」用法(二)一種接続詞的助辞 |
| 第十三節 | 問答語用法 | 第五十一節 | 「ガ」用法意趣(三) |
| 第十四節 | 「居リ」用法 | 第五十二節 | 「ガ」用法意趣(四) |
| 第十五節 | 「ニ」用法意趣(二) | 第五十三節 | 「デ」用法(四) |
| 第十六節 | 「ニ」用法意趣(三) | 第五十四節 | 「デ」用法(五) |
| 第十七節 | 過去推測 | 第五十五節 | 「ノ」用法意趣(四) |
| 第十八節 | 「デ」用法意趣(一) | 第五十六節 | 「ト」(ニ)及「バ」用法意趣 |
| 第十九節 | 「参リ」用法 | 第五十七節 | 「ト」用法(三) |
| 第二十節 | 「下サイ」用法及意趣(一) | 第五十八節 | 「モ」用法意趣(二) |
| 第二十一節 | 「下サイ」用法及意趣(二) | 第五十九節 | 「ノ」用法(四) ⁶ |
| 第二十二節 | 「下サイマセンカ」 | 第六十節 | 「ノ」用法意趣(六) |
| 第二十三節 | 「下サイマスナ」或ハ 「下サルナ」用法(四)(否定) | 第六十一節 | 「ノ」用法(七) |
| 第二十四節 | (下サイ)用法意趣(五) | 第六十二節 | 「テモ」「デモ」用法 |
| 第二十五節 | 分詞的用法 | 第六十三節 | 「ノデ」用法意趣 |
| 第二十六節 | 否定法 | 第六十四節 | 程用法意趣(一) |
| 第二十七節 | 「ニ」用法(四) | 第六十五節 | 「程」用法意趣(二) |
| 第二十八節 | 「ニ」用法(五) | 第六十六節 | 「程」用法意趣(三) |
| 第二十九節 | 「ニ」用法(六) | 第六十七節 | 「ノニ」用法意趣(二) ⁷ |
| 第三十節 | 「ダ」「タ」及「テ」用法 | 第六十八節 | 「ノニ」用法(二) |
| 第三十一節 | 「ガ」「ハ」用法分別 | 第六十九節 | 「ノニ」用法(三) |
| 第三十二節 | マス意趣 | 第七十節 | 「ノニ」用法(四) |
| 第三十三節 | マセウ意趣 | 第七十一節 | 「ノニ」用法(五) |
| 第三十四節 | 「ト」用法(二) | 第七十二節 | 「カ」「ナリ」及「ソレトモ」用法 |
| 第三十五節 | 「ニ」用法(七) | 第七十三節 | 「キリ」及「ギリ」用法意趣 |
| 第三十六節 | 第一、「ヨリ」……「マデ」用法 | 第七十四節 | 「ヤウ」用法 |
| 第三十七節 | ヨリ用法(三) ^{ママ} | 第七十五節 | サへ用法(一) |
| 第三十八節 | 「ニ」用法意趣(八) | 第七十六節 | 「サへ」用法(二)及「スラ」 |

⁶ 目次では(五)、本文の見出しでは(五)となっている。正しくは(五)であろう。

⁷ 目次では(一)、本文の見出しでは(二)となっている。正しくは(一)であろう。

参考1をみると、だいたい今日広く言われるところの助詞にあたるものと捉えられるが、ところどころそう捉えかねるところもある。例えば「第十四節「居り」用法」には

將動詞「居り」爲助動詞用之時，其意變成狀態尚繼續，事變行動尚依然進行意。

(25頁・3行目・第14節。以下略示)

花ガ^{動詞}散^{的動詞}ツテ居リマス，(25・6・14)

とあり、「第十九節「参り」用法」には

「参り」者有「往」「來」二義。尊敬的動詞也。日常多用之，(36・8・19)

とあるように、「第一篇助詞」の中には助詞だけではなく、助動詞(今日では補助動詞，または補助用言にあたる)や動詞に関する記述がある。

第二篇動詞は全16節(171-202頁)ある。どのような項目がたてられているか、参考2として掲げる。

参考2『日語活法』第二篇動詞に於ける項目

| | | |
|-----------------|-----------------|---------------|
| 第一節 (一)四段活用動詞 | 第七節 (練習) | 第十三節 名詞法 |
| 第二節 (二)上一段活用動詞 | 第八節 過去假想法(過去推測) | 第十四節 條件法(前提法) |
| 第三節 (三)下一段活用動詞 | 第九節 現在法(終止法) | 第十五節 練習 |
| 第四節 (四)カ行變格活用動詞 | 第十節 否定法 | 第十六節 請求法 |
| 第五節 (五)サ行變格活用動詞 | 第十一節 中止法(分詞法) | |
| 第六節 將來法(一) | 第十二節 連體法(形容法) | |

「第一節(一)四段活用動詞」から「第五節(五)サ行變格活用動詞」までは動詞の活用の種類の紹介をし、具体的な動詞を挙げ、活用表を載せて説明している。但し、この活用表は活用形がすべての活用の種類に於いて「第一變化」「第二變化」「第三變化」「第四變化」となっている。その上で、第六節以降、動詞の意味について説明している。例えば、「第十六節請求法」に以下のような説明がある。まずことばのかたちに注目させ、その上で意味について説明するという方針がうかがえる。

四段動詞第四變化者命令也，但上下一段カ，サ兩變格動詞第二變化下連助動詞ナサイ，或其下添テ，而下連ナイ以表之，在于日常語則。每連ナサイ下サイ，下サイマシ等。この活用形の名称について、「第〇變化」という名称は大槻文彦『言海』にある「語法指南」を参考にしていたと推されるが、前述のとおり形式を重視したものであり、「語法指南」と同様には捉えられない。大宮貫三『日語活法』にみる文法観については、さらなる調査のうえ述べることとしたい。参考3として各活用の種類毎に活用表を掲げる。

参考3 『日語活法』に於ける動詞活用表

四段活動詞⁸

| | 第一變化 | 第二變化 | 第三變化 | 第四變化 |
|----|------|------|------|------|
| カ行 | 書カ | 書キ | 書ク | 書ケ |

上一段活用表⁹

| | 第一變化 | 第二變化 | 第三變化 | 第四變化 |
|----|------|------|------|------|
| ア行 | (鑄)イ | (鑄)イ | 鑄ル | 鑄レ |

下一段活用表¹⁰

| | 第一變化 | 第二變化 | 第三變化 | 第四變化 |
|----|------|------|------|------|
| ア行 | (得)エ | (鑄)エ | 鑄ル | 鑄レ |

カ行變格動詞

| カ行變格動詞 | 來 | 第一變化 | 第二變化 | 第三變化 | 第四變化 |
|--------|---|------|------|------|------|
| | | コ | キ | クル | クレ |

サ行變格動詞¹¹

| | 第一變化 | 第二變化 | 第三變化 | 第四變化 |
|--------|------|------|------|------|
| サ行變格動詞 | シ(セ) | シ | スル | スレ |

第三篇形容詞は全5節(203-208頁)ある。どのような項目がたてられているか、参考4として掲げる。

参考4 『日語活法』第三篇形容詞に於ける項目

第一節 形容詞變化

第二節 属于^マシ語彙¹²

第三節 属于シイ語彙

⁸ 以下サ行・タ行・ハ行・マ行・ラ行と続いているが、省略した。

⁹ 以下カ行・タ行・ナ行・ハ行・マ行・ヤ行・ラ行・ワ行と続いているが、省略した。

¹⁰ 以下カ行・サ行・タ行・ナ行・ハ行・マ行・ヤ行・ラ行・ワ行と続いているが、省略した。

¹¹ カ行變格動詞と異なる体裁になっているが、このようになっている。

¹² 目次・本文見出しともにシとなっている。正しくはイであろう。

¹³ 本文第二節(204・4・2)では「属于シ語彙」と記されているが、形容詞語尾変化有二種而已。

イ、シイ二変化通各形容詞同一矣。(204・1・1)と記されているところから、「属于イ語彙」の誤りであろう。

第四節 属于ナ語彙

第五節 形容詞之法

第三篇形容詞第一節の冒頭に、以下のように記してある。

形容詞者冠名詞，代名詞而形容制限其意詞也。其類有二，一則本來者有語尾變化，他則名詞(有形容的意義者)下連ナ以成形容詞者是也。

現在、日本語教育に於いて形容詞をイ形容詞・ナ形容詞と二つに分類し、形容動詞という分類を行わないのが一般的であるが、明治期に於いて既にその分類がなされていたことは、日本語教育史上、注目すべきであろう。さらに、第二節・第三節・第四節に於いて、「属于イ語彙」「属于シイ語彙」「語尾添ナ」としてあてはまることばを列挙している。

第四篇助動詞は全9節(209-224頁)ある。どのような項目がたてられているか、参考5として掲げる。

参考5 『日語活法』第四篇助動詞に於ける項目

- 第一節 能働^マ助動詞
- 第二節 被働^マ助動詞
- 第三節 茶^マ謙^マ的助動詞¹⁴
- 第四節 使役働助動詞
- 第五節 使被働助動詞
- 第六節 自然働態助動詞
- 第七節 否定助動詞
- 第八節 願望的助動詞
- 第九節 時的助動詞

「第一節能働助動詞」では可能の助動詞、「第二節被働助動詞」では受け身の助動詞、「第三節恭謙的助動詞」では尊敬の助動詞ならびに「動詞轉化助動詞」として「遊バス」「マスル」「入ラツシヤル」「ニナル」「下サル」「ナサル」「マス」の七つをとりあげている。「第四節使役働助動詞」では使役の助動詞、「第五節使被働助動詞」では使役受け身、「第六節自然働態助動詞」では自発の助動詞、「第七節否定助動詞」では打消の助動詞、「第八節願望的助動詞」では願望の助動詞「タイ」、
「第九節時的助動詞」では「マス」「テキル」「テヲル」「デス」をとりあげている。

以上、『日語活法』の構成と特徴について概観した。まとめると、以下のとおりである。

- ・「第一篇助詞」では、現在一般に使用されている「助詞」とは異なる項がある。

¹⁴ 目次に於いては「茶謙的助動詞」と記されているが、本文の見出し(213・12・3)には「恭謙的助動詞」と記されている。目次にある表記が誤りであろう。

- ・ 「第二篇動詞」では、現在の活用形とは異なり、各活用の種類毎に活用語尾のかたちに注目し、「第一變化」「第二變化」「第三變化」「第四變化」と名づけ、まずことばのかたちに注目し、その上で下接することばによって意味を説明するという方針がうかがえる。
- ・ 「第三篇形容詞」では、「屬于イ語彙」「屬于シイ語彙」「語尾添ナ」と三分し、いわゆる形容動詞を形容詞の一つとしている。
- ・ (附)活用表にある「第〇變化」という名称は大槻文彦『語法指南』を参考にしていたものと推される。

3. 『日語活法』のことば

次に、『日語活法』のことばについて、いくつか見ていくことにする。

3.1 可能表現

明治期まで用いられていた「(ら)れる」「できる」に加え、「できる」や可能動詞が使用されはじめ、バリエーションの増えた可能表現であるが、『日語活法』に於いて可能表現は58例ある。分類すると以下のようになる。

- ・ 出来ル
- ・ レル・ラレル
- ・ 可能動詞

出来ルを用いたもののうち、連体形＋コト＋助詞＋「出来ル」は、58例中11例ある。そのうち助詞に「ガ」「ハ」をとるものが各4例あり、以下各1例は「ニ」「ノ」「モ」をとるものであった。また、肯定形と否定形の用例数を比較すると、肯定形が1例、否定形が10例であった。以下、用例を挙げる。

- ・ 支那ト日本ハ遠クテモ二週間デ行ク事ガ出来マス, (141・36・2)
- ・ 甲サンハオ知ガ多過ギルノデー意専心ニ研究スルコトガ出来マセヌ, (142・4・63)
- ・ 那人ガ甚麼様ニ敏腕デモ此ノ難関ヲ脱ケル事ハ出来マイ(134・6・62)
- ・ 彼ノ時彼ノ論駁ヲ破ル事ノ出来ナカツタ程, 残念ナコトハアリマセヌ, (145・10・65)

名詞＋助詞＋「出来ル」は、5例ある。そのうち、肯定形の2例が助詞に「ガ」をとり、否定形の3例が「ハ」をとるものであった。以下、用例を挙げる。

- ・ 私ハ倫敦ニ居マシタカラ英語ガ出来マス, (107・6・48)
- ・ 咄ハ分明リマシタガ賛成ハ出来マセヌ, (110・11・50)

名詞に直接「出来ル」の付く例はなかった。

レル・ラレルは、23例ある。上接する動詞の活用の種類別に、四段動詞が17例、下一段動詞が2例、上一段動詞が2例、カ変が1例、サ変が1例であった。肯定形と否定形の用例数を比較すると、肯定形が15例、否定形が8例であった。

- ・ 三十分デ横浜マデ参ラレマス, (118・8・54)

- ・ 学問ガ能ク覚エラレルハ結構ダガ遊ンデ許リ居ルノニ困リマス, (211・3・1)
- ・ 否上手ニハ能キマセンガ少シハ運転シラレマス, (210・7・1)
- ・ 起テキレバキラレルガ明日困ルカラ寝ミマセウ, (211・12・1)
- ・ 貧シクテモ貴クテモ品性ガナケレバ紳士トハ言ハレナイ, (140・6・62)
- ・ 昨日臥セツタギリ起ラレマセン, (160・5・73)
- ・ 私ニハ能ク日本語ガ覚エラレマセヌ, (210・4・1)
- ・ 甲様ハ今日, 病気デ来ラレマセヌ, (211・1・1)

可能動詞は、16例ある。動詞語幹の拍数別に見ると、二拍が11例、三拍が5例である。肯定形と否定形の用例数を比較すると、肯定形が10例、否定形が6例であった。以下、用例を挙げる。

- ・ 私ハ笛ガ吹ケマセウ, (77・11・33)
- ・ 私共モ文章ヲ作レマセウ, (77・12・33)
- ・ 悲シイヤウナ情ナイヤウナ何トモ曰ヘヌ感ジガスル, (162・3・74)
- ・ 馬ノニハ疾ク走レルガ牛ノニハ走レナイ, (152・3・69)
- ・ イクラ上手ニ遊ンデモ何時カハ知レル(138・4・62)
- ・ イクラ日本語ガ上手デモ箸ノ持チ様デ直グ西洋人ダ事ガ知レタ, (166・12・74)

以上、『日語活法』に於ける可能表現を見てきた。『日語活法』に於いて可能表現各々がどういった順で出てくるのかに注目してみると、第一篇助詞に於ける項目の第二十六節(51頁)に「レル・ラレル」、第三十三節(77頁)に可能動詞、第三十五節(81頁)に連体形+コト+助詞+「出来ル」、第四十八節(107頁)に名詞+助詞+「出来ル」という順であった。

3.2 当為表現

明治期に於いて、典型的な「ンケレバイカン」等、さまざまなバリエーションのあった当為表現であるが、『日語活法』に於いては4例ある。前項で分類すると「ナイ」系の「ナクテハ～」が1例、同じく「ナイ」系の「ナケレバ～」が3例、また後項で分類すると「イク」系が3例、「ナル」系が1例である。『日語活法』に於いても田中(1967)の指摘に同様である。

〈「ナケレバ」-「イケマセヌ」〉

- ・ 人ハ人ヲ助ケルナリ事業ヲ起スナリソレトモ教育ヲスルナリ何かシナケレバイケマセヌ, (157・7・72)
- ・ 洋行シタケレバ準備ヲ善クシナケレバイケマセヌ, (223・7・8)
〈「ナケレバ」-「イケマセン」〉
- ・ 国家ノ諸機関ノ中教育程大切ナ者ハアリマセヌ, ソレデスカラ教育ハ大事ニシナケレバイケマセン, (146・3・65)

3.3 「マイ」「ナイダロウ」

明治期に於いて「マイ」「ナイダロウ」の使用状況も注目される場所であるが、『日語活法』に於いては、「マイ」は8例、「ナイダロウ」は0例という使用状況であった。田中(1981)は「マイ」について、以下の如く述べている。

明治中ごろから、少なくとも推量の意味では、あまり使われなくなり、(中略)「マイ」

は、もっぱら意志のみを表す単純な助動詞に転じる傾向が強まってきた。

『日語活法』に於いては、「マイ」について以下の如く説明し、「マイ」を打消推量としている。明治期に於ける「マイ」の実態の一端を知るうえで、また当時の日本語教育の現場に於いて「マイ」をどのように捉えていたのかを知るうえで、興味深い記述である。

現在否定別有マスマイ以表否定的推量、過去亦別有マセナンダ。(52・4・26)

以下、用例を掲げる。

- ・ 明日私ハ學校へ行キマスマイ, (52・6・26)
- ・ 未十二時ガ鳴リマスマイ, (52・9・26)
- ・ 未ダ寒イカラ梅モ咲クマイ, (222・3・7)
- ・ 私ハ希望ノアル間ハ決シテ死ヌマイ, (222・6・7)

3.4 「マセナンダ」「マセンデシタ」

先の『日語活法』にあった解説文中の「マセナンダ」について見てみると、「マセナンダ」の用例は以下の2例である。

- ・ 雨ガ歇ミマセナンダ, (52・8・26)
- ・ 私ハ昨日散歩ニ行キマセナンダ, (52・13・26)

この「マセナンダ」は現代の「マセンデシタ」につながるものであるが、『日語活法』には「マセナンダ」と共に「マセンデシタ」の例も見られる。「マセンデシタ」は16例、以下用例を掲げる。

- ・ 一昨日ハ芝居へ行ク積デツイ参リマセンデシタ, (52・2・26)
- ・ 昨夜雲ガ散リマセンデシタ, (52・7・26)
- ・ 彼ハ承知シタガ私ハ承諾致シマセンデシタ, (110・4・50)

また、打消過去の「ナンダ」に取って代わる「ナカッタ」の例は、以下の1例のみであった。

- ・ 彼ノ時彼ノ駁論ヲ破ル事ノ出来ナカッタ程、残念ナ事ハアリマセヌ, (145・10・65)

「マセナンダ」から「マセンデシタ」、「ナンダ」から「ナカッタ」に変化してゆくさまの一端がうかがえる。

3.5 原因理由の接続助詞「ノデ」「カラ」

原因理由の接続助詞「ノデ」「カラ」については、「ノデ」が17例、「カラ」が44例であった。うち文末にある「カラ」が3例であった。『日語指南』に於いても「ノデ」「カラ」の使用は「カラ」が「ノデ」を上回っていた。以下、用例を掲げる。

<「ノデ」>

- ・ 空ガ霽(は)レナイノデ頭痛ガスル, (52・3・26)
- ・ 彼ハ通鈍ナ方デスガ忍耐力ガ強イノデ近頃ハ大層ナ進歩デス, (141・12・63)

<「カラ」>

- ・ 雨ガ降りマスカラ傘ヲ貸シテ下サイ, (41・1・21)
- ・ 汝ハ遊ンデ許リ居ルカラ失敗シヨウ, (183・12・6)
- ・ 往ケバ往ケルガ詰ラナイカラ往キマセン, (211・11・1)

<文末にある「カラ」>

- ・ 乙サンガ買ツタ家ヲ見ニ行キマセウ, 二階造リデ見晴シガ宜イ相デスカラ,
(49・11・25)
- ・ 快ク孰ラカニ決メテ下サイ困リマスカラ, (202・4・16)
- ・ 此方へ御出遊バセ, 好イ景色デ御座イマスカラ, (216・3・3)

3.6 「シ」と「セ」・「マシ」と「マセ」の表記

伊藤(2003b)に於いて『日語指南』の表記について「イ」と「エ」, 「イ」と「ユ」, 「シ」と「ス」の交替や拗音の直音化表記について述べたが, 『日語活法』に於いても「シ」と「ス」, 「シ」と「セ」の表記について, 以下のような例がある。

<「シ」と「セ」>

- ・ 心配ヲサシテ下サルナ, (44・19・23)
- ・ 人ヲ泣カシテ下サルナ, (46・1・23)

<「マシ」と「マセ」>

- ・ 二三十分程御待チニナリマスト, 主人ガ帰リマスカラ何卒御上り下サイマシ,
(143・8・64)
- ・ 御父サン坊ヤノニ御饅頭ヲ沢山買ツテ来テ下サイマシ, (150・9・68)
- ・ 人ガ込合ヒマスカラ拘摸ノ御用心ヲナサイマシ, ソレカラ切符ヲ潰サンヤウニナサイマシ, (166・3・74)
- ・ 其ノ洋盃ヲ取ツテ下サイマシ, (202・2・16)

3.7 その他

これまでとりあげた事項の他に, 管見の限り目についた用例を掲げておく。

上一段活用「足ル」の未然形「足り」と五段活用の未然形「足ラ」が共に挙がっている。

- ・ 遣り足ラナイノハ遣り過ギト同ジ事デス, (127・12・59)
- ・ 口ハ幾何慎ンデモ慎ミ足ラナイ, (138・11・62)
- ・ 男ハ大キイガ知恵ガ足りナイ, (110・10・50)

また、「マシタノデスカ」という例も見られる。

- ・ 此ノ文章ハ貴方ガ書キマシタノデスカ, (127・3・59)

また、『日語活法』に於いて、ことばの右側に一本線・二重線が付されている例がある。『日語活法』には凡例がないため、表記についての方針は不明であるが、調査の結果、一本線は外来語の普通名詞ないし副詞であり、二重線は外国の固有名詞であることがわかる。以下、用例を掲げる。

<一本線>

其テーブルノ上ニアル書物ハ小説デスカ大層綺麗デスネ, (50・1・25)

私ハハット驚キマシタ, (79・8・34)

子供ノ時分芝居ヲ観タツキリト行ツタ事ハアリマセン, (160・8・73)

祝捷ノイルミネーションデ東京ハ花ノヤウデス, (163・10・74)

<二重線>

仏蘭西皇帝ノ奈破翁ハコルシカノ人デシタ, (21・7・12)

米国大統領ノローズベルト氏ハ英雄デス, (21・10・12)

マセドニア王ノフヒリップハ歴山大帝ノ父デス, (22・3・12)

阿弗利加ノサハラハ大砂漠デス, (119・12・55)

蒙古ノコビモ砂漠デス, (120・1・55)

北米ノナイヤガラハ大瀑布デ有名デス(120・2・55)

印度ノヒマヤラ山ハ世界ノ高山デス, (120・14・55)

4. おわりに

以上、明治期日本語教科書大宮貫三『日語活法』について、紹介として著者大宮貫三について、『日語活法』の構成、その中に見られる大宮貫三の文法観、語法等概見した。日本語教育史上また日本語史上過渡期であった明治期に於いて、『日語活法』は大宮貫三の日本語教育の成果がうかがわれると同時に、近代日本語の資料としても貴重な資料として位置づけることができよう。今後も近代日本語教科書を資料として日本語教育史・国語史両面からのアプローチを試みたい。

参考文献と資料

伊藤孝行 (2003)「明治期日本語教科書」『日語指南』の語法. 『国語研究』67号, 30-46.

伊藤孝行 (2005)「明治期日本語教科書大宮貫三著『日語活法』における文法学習項目」.

『国語研究』68号, 1-11.

大槻文彦 (1904)『言海』. 大槻文彦.

※本稿では縮刷版(明治37年)の内容を複製したちくま学芸文庫版(2004)を使用した。

金井保三 (1904)『日語指南壹』. 丁酉社.

金井保三 (1905)『日語指南貳』. 丁酉社.

田中章夫 (1967) 「江戸語・東京語における当為表現の変遷」. 『国語と国文学』44-4.

田中章夫 (1981) 「近代語(明治)」. 『講座日本語学3』. 明治書院.

吉岡英幸 (1994) 「早稲田大学清国留学生部—そのカリキュラムと日本語教師—」. 『講座日本語教育』第29分冊. 早稲田大学日本語研究教育センター.

吉岡英幸 (2000) 「明治期の日本語教材」. 『日本語教育史論考—木村宗男先生米寿記念論集—』. 凡人社.

資料1 大宮貫三『日語活法』表紙



大宮貫三著

日語活法

早稲田大學出版部蔵版

資料2 大宮貫三『日語活法』序(1頁)

日語活法序

昭代之世斯文維隆欲贊文化而報舊德於是乎
 我邦之士以我邦語言教之隣邦子弟之事始
 起焉早稻田大學講師大宮君雪山篤學愛才
 之士也夙體善鄰之誼教育清園子弟有年於
 茲矣今也又著一書來而示余余受讀之全篇

日語活法
序

資料3 大宮貫三『日語活法』上一段活用表(175頁)

| | | | | | | | | | | |
|-------------------|-----|---|---|---|-----|-----|---|---|-----|--------|
| 日語活法 第二編 動詞 | ワ | ラ | ヤ | マ | ハ | ナ | タ | カ | ア | 上一段活用表 |
| | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | |
| | (居) | 懲 | 老 | 恨 | (乾) | (煮) | 朽 | 盡 | (鑄) | |
| | 井 | リ | イ | ミ | ヒ | ニ | チ | キ | イ | |
| | (居) | 懲 | 老 | 恨 | (乾) | (煮) | 朽 | 盡 | (鑄) | |
| | 井 | リ | イ | ミ | ヒ | ニ | チ | キ | イ | |
| | キ | 懲 | 老 | 恨 | 乾 | 煮 | 朽 | 盡 | 鑄 | |
| | ル | ル | ル | ル | ル | ル | ル | ル | ル | |
| | ホ | 懲 | 老 | 恨 | 乾 | 煮 | 朽 | 盡 | 鑄 | |
| | レ | レ | レ | レ | レ | レ | レ | レ | レ | |